

書評 Book Review

柳澤 悠著

『現代インド経済 — 発展の淵源・軌跡・展望』

名古屋大学出版会 2014年 p.417 ISBN978-4-8158-0757-3

岡橋 秀典*

本書は私にとって待ちに待った一冊である。著者と私がともに関わっていた人間文化研究機構の研究プロジェクト「現代インド地域研究」は、第一期5年間で2014年度で終了する。このプロジェクトによる研究集会の場で、著者は現代インドの動態について常に一貫した主張をしてこられた。それは、簡単に言うと「下からの発展」であり、今日の経済発展への農村や都市インフォーマル部門の役割を重視する見方である。それに対し、私はやや異なる見解として、大都市、さらにはそれが連担して形成される巨大な集積地域であるメガリージョンの役割を重視すべきではないかと述べたことがある。このような経緯もあって、本書は著者の主張を理解するための待望の書であった。この度本書に接して、正直のところ、圧倒される思いがする。著者の主張がきわめて体系的であったこと、またその検証が周到であったことを知り、そのためもあって、この書評を書き上げるのに殊の外時間を要した。それは間断なく続く大学の用務に時間をとられたこともあるが、それよりは執筆の決断に時間を要したというのが本当のところである。

本書で驚嘆すべきは、仮説の検証のために用いられた文献の数々である。これほどの数の文献をどのように探索されたのか、いくらインターネットによる検索システムが普及してきたと言っても、私には簡単になしうることは思えない。おそらくは、長年にわたって蓄積された学識とそれに加えて国際的な人的ネットワークの豊かさによるものであろう。

本書は、それだけに重厚で内容の濃い書物に仕上がっている。しかも、消化不良にならないよう読者の理解を助ける工夫もなされている。それは、序章において本書の仮説が明示されていること、3部ある各部の最初には部の要旨が簡潔に述べられていること、そして終章では本書の主張が明瞭に提示されていること

に現れている。これらにより、読者は広大で深い森に分け入っても、道に迷うことなく何とか出口にたどり着けるに違いない。

まず紹介の第一歩として、本書の目次を記しておきたい。

序章 現代インドの経済成長の淵源を求めて

第I部 経済発展への胎動—第一次大戦後の輸入代替工業化と農村・農業社会の変容

第1章 世界農業不況下の植民地インド—農業生産と農村社会の変化

第2章 植民地下での製造業部門の発展—民族運動、輸入代替工業化と多層的労働市場

第3章 インフォーマル産業発展の原型—在来・小零細企業の展開と消費構造の変動

第II部 独立インドの経済発展—基盤の形成

第4章 国家主導の輸入代替工業化—工業化の基礎の形成

第5章 独立インドの農業発展

第6章 農村社会構造の変容と農村市場の拡大

第III部 経済発展加速の構造—二層的發展とその交錯

第7章 小・零細工業の発展と低価格品生産

第8章 サービス部門の拡大と農村社会経済変動

第9章 農村—都市インフォーマル部門経済生活圏

第10章 経済改革と工業・サービス産業の発展—大企業部門を中心に

第11章 インド社会の階層的構造は変化したのか—都市と農村社会の現在

終章 21世紀インド経済の制約と可能性—二層的社会経済構造の形成と展望

本書は、本論が3部11章からなり、それに序章と終章が付されている。本論の基本的な構成は時代順であり、植民地時代（計3章）、独立後の計画経済期（計3章）、そして経済自由化以降（計5章）という配列

* 広島大学大学院文学研究科

となっている。

本書の目的は序章のタイトルにあるように、現代インドの経済成長の淵源を明らかにすることであろう。それゆえ、序章は、1980年代からの成長率の加速はなぜ起こったか。世の中に流布している経済成長加速の原動力を親市場主義的な経済政策の採用に求める見解への批判から始まる。そのうえで、本書の主張が仮説の形で以下の10点にわたって述べられる。これらは周到に構築されているので、仮説群を追うだけでも著者の主張の輪郭が概ね理解される。

1. 農業・農村経済や農村市場の発展は、1980年代以降の経済成長にとって基盤的な重要性をもつ。
2. 19世紀末以来の長期の農業生産の発展過程こそが、農村市場を発展させ、ひいてはインド経済の成長率の加速化を促進した重要な要因である。
3. 20世紀初頭から始まる、村落社会の社会経済的な支配構造の変容と下層民の自立化の動向が、下層民の所得増大の背景となり、農村社会が市場として発展しえた基盤となった。
4. 農村市場では、消費は下層階層の社会的上昇の象徴として行われる傾向をもち、その消費嗜好は「疑似ブランド品」に向かう。
5. インド経済には、このような工業やサービスへの需要の拡大に対応して、供給を行う体制が既にそれ以前に成立していた。
6. 1980年代以降の工業生産需要の多くが、農村における安価な「疑似ブランド品」嗜好であったことが、インドの工業発展のあり方に大きな影響を与えた。
7. サービス産業や建築業においても、1990年代末までは農村需要が中心的役割をもち、インフォーマル部門中心の発展が見られた。
8. 農村需要の拡大とそれに依存した都市インフォーマル産業の発展、それらへの農村からの出稼ぎ移民の就業など都市農村の密接な関連を把握する枠組みとして、「農村—都市インフォーマル部門経済生活圏」を提案する。
9. インド経済の自由化とグローバル化政策の歴史的な意義は、耐久消費財産業や通信産業などが一連の自由化政策の中で製品価格の低下と品質の向上・競争力の強化を実現し、農村—都市インフォーマル部門経済生活圏に市場を拡大したこと、それとともに、それらの購入者層として、都市インフォーマル部門の経営者層から創出された富裕層を付け加えたこと、さらに技術集約型の産業において製品の国際的な質の確保がなされ

たため、輸出市場への進出も可能となったことに求められる。

10. インドの経済発展にはインフォーマル部門とフォーマル部門、非エリート階層と都市上層階層という二層性がみられるが、その淵源は農村社会の二層性にあり、教育の構造や労働市場の二層性、企業における管理層と労働者層の二層性、消費市場の二層性、流通機構の二層性など、インド社会の物的社会的な再生産の構造を特徴づけている。

最後に、二層の発展が経済自由化政策によって交錯することで、インド経済の新たな成長基盤がつけられたとの見解を示す。

第I部は植民地期の20世紀前半を扱う。独立以降、さらには現代の社会経済的発展につながる原型が探求される。第1章では農業と農村社会に焦点を当て、農業生産の停滞の要因を世界的な農業不況や世界恐慌の影響による農産物価格の低下に求める一方、発展の胎動として農業集約化の動きや下層階層における自立への胎動を見いだす。第2章は農業と対照的に高い成長率を示した製造業、特に大規模工業に光を当てる。保護関税制度の部分的導入などによる輸入代替工業の動きとともに、この時期に明確となった労働市場の多層的構造の形成を確認する。第3章は在来産業や小・零細規模経営でも発展がみられたこと、それが初期の輸出指向から国内市場指向に移行する中で実現したことを指摘する。そして国内需要の拡大は、かなりの程度下層民の消費パターンの変化によって支えられていたとする点が重要である。

第II部は独立以降、1980年頃までの経済発展について、工業、農業、農村社会と農村市場の三つの側面から検討し、1980年代以降の高い経済成長を実現する基盤の形成を明らかにする。第4章は国家主導の輸入代替工業化戦略の下で、インドが産業構造の高度化と国内自給体制の構築に成功し、その後の経済発展の基礎が築かれたこと、しかし同時に高コスト体質を招いたことを指摘する。これに加えて技術を know-why のレベルで習得して現地適応型の技術発展を実現していたこと、膨大な科学的・技術的な人材プールを構築していたとするが、この点は重要な論点である。第5章は工業生産と並んで経済発展の鍵となった農業生産の発展を論ずる。独立後1960年代までに、灌漑投資の拡大などにより既に農業生産の拡大を実現していたが、それに続く緑の革命は、農業後進地域を含むインド全域に、また小規模農家を含む全階層に深く浸透し、農業生産の大幅な向上と所得の増大をもたらしたこと

を強調する。環境への影響が危惧されているものの、従来に比して緑の革命を格段に肯定的に評価している点が特徴と言えよう。第6章は、前章の農業発展と非農業就業の拡大を通して、下層民の自立化など農村社会構造の変化が進み、さらに農村市場の拡大が生じたことが、南インドでの著者の詳細な事例研究などにもとづき高い説得力をもって論じられている。続く第Ⅲ部における論の展開にとって重要な章であるといえよう。

経済発展の加速の構造を扱う第Ⅲ部が本書の中核的位置を占めることは言うまでもない。小・零細工業、サービス部門、農村と都市の連結、大企業部門の工業・サービス産業、社会の階層的構造という5つの側面からこの点についての考察が進められる。ここでは経済自由化以降の経済発展の要因として注目されることの多い大企業部門よりも、小・零細工業、サービス部門の役割を重視する点に大きな特徴がある。まず第7章では、小・零細工業が雇用拡大面で大きな役割を果たしてきたことを確認したうえで、その発展が農村市場や貧困層市場に支えられてきたこと、その商品の特質は「疑似ブランド品」であることを指摘し、小・零細工業が「規模の経済」の論理に反して、安価製品の生産を可能としている仕組みを6点にわたって考察する。農村社会や地域社会を基盤とした「下から」の産業発展が豊富な事例により実証されている。続く第8章では、サービス部門の成長に焦点を当て、それにもっとも寄与したのが伝統的部門であり、その拡大を進めた推進力として農業の発展を起点とする農村地域の構造変動が想定できること、都市のサービス部門の拡大も伝統的な分野が中心であったことが述べられている。第9章は、7章と8章の考察を受けて、都市インフォーマル部門・階層と農村の経済・社会との間の結びつきを論ずる。両者の間には、労働力などの人的移動とともに、商品や物の流通・移動もみられ、これをふまえて両者にまたがった経済圏・生活圏の存在を想定できるとし、それを新たに「農村—都市インフォーマル部門経済生活圏」と呼んでいる。これにより現代のインド経済社会の構造の重要な部分が理解されると述べるように、本書の根幹をなす重要な概念である。第10章は、これまでから注目されてきた大企業部門の発展を検討する。ただ、その際にも、その発展の背景にある農村市場やインフォーマル産業の意義を忘れていない。また、新資本家グループの形成、技術開発・訓練システムと技術集約的産業の発展といった新たな論点が提示されているのも貴重である。第11章は「インド社会の階層的構造は変化したのか」と問いかける。

その答えは、二層的構造は変化しなかったということになるだろうか。インド社会は、都市中間階層と農村—都市インフォーマル部門経済生活圏からなる二層の構造をなしていると結論する。

本書は、この二層的構造こそが今日のインドの経済発展の特質を解く鍵と考える。終章ではこの問題にしばらくこんだ議論が展開される。インドの社会経済にみられる二層性の根源を、土地改革を経ても基本的に変わらなかった農村社会の二層性に求める一方、インド経済の発展がインド社会の階層構造の一定の弱化によって推進されたと言う。しかし最終的には、この階層性が経済成長にとって次のような事項について制約要因となることが強調されている。その一つは非農業部門の国内市場の拡大、二つ目はインフォーマル企業の中小工業化など産業構造の高度化、三つ目は労働集約型産業における輸出発展、四つ目は、企業における管理層と労働者層の階層的断絶による労働者コミットメント、以上である。最後に展望が付されているが、その内容は読者に委ねたい。

本書は、現代インドの経済発展について、独自の立場から実証的に論じた重要な研究と言えよう。特に、経済と社会を交錯させた論の展開が大きな魅力となっている。それは著者の長年のフィールドでの調査がなければ構築できなかったものであろう。この豊富な内容を十分に理解できた自信はないが、いくつか気になった点をあげておきたい。

第一は、多用されているインフォーマルという用語についてである。第7章冒頭では、インドの文脈で、工場法における未登録工場のグループをインフォーマル部門（非組織部門）とする厳密な定義が示されている。その一方で、第9章では都市インフォーマル部門、あるいはインフォーマル階層としてより広い意味で使われている。途上国経済論や過剰都市化論で用いられてきたインフォーマルセクターに近い意味であろうが、インフォーマルという用語は本書のキーワードであるだけに、本書の中で微妙に異なっているように思われる。工場法というインフォーマル部門の工場は、そのまま後者のインフォーマル部門に適合するのであろうか。

第二は、農村—都市インフォーマル部門経済生活圏の概念についてである。この概念の意図するところはよく理解できるが、経済生活圏というタームがわかりにくい。生活圏は日常生活の圏域として通勤圏や商圏をベースに捉えるのが通常であり、たとえ出稼ぎ等で密接な交流があってもその行き先まで生活圏とするのは適切ではないように思われる。それゆえ、この場合

は、農村―都市インフォーマル部門経済圏でもよいように思われる。

第三には、二層の構造の問題である。インドに関する研究者であれば誰もこのような二分的性格を実感しているに違いない。著者は、この問題を基本的にインド独自の特性にもとづく枠組みで説明しているが、経済の二重構造自体は広く途上国にみられるので、より一般的な枠組みでも検討する必要があるように思われる。インドの社会経済にみられる二層性の根源を農村社会の二層性に帰着させるのは大変興味深い議論であるが、そこに若干の疑問を感じる。

第四には、現代インドの社会経済を論じるにあたって、インドがもつ人口構造上の特性がほとんど考慮されていない点である。最近は人口ボーナス論も議論されるようになってきているが、都市インフォーマル部門の拡大については膨大な若年人口の存在を念頭に置く必要があるように思われる。

以上、若干の疑問点を述べたが、本書の議論をさらに深めるには、インド以外の国、特に中国との比較や、インド国内の地域性の追究が有効なように思われる。後者の方は我々に与えられた宿題でもあるが、前者の

課題については本格的な検討をぜひ期待したい。

筆者がインド農村の調査を始めた1990年前後、我々の研究にとってもっとも参考になったのは、著者の南インドの1農村に関する論文であった（柳澤悠（1989）「村と町のつながり」、白田雅之・押川文子・小谷 汪之編『もっと知りたいインド II』弘文堂）。農村の変貌が、労働市場の変化をふまえて克明に描かれており、私の調査で遭遇したITIの意義がわかったのもこの論文のお陰であった。本書はこのようなフィールドとの関わり、さらには著者のインフォーマル産業への強い関心がなければ実現しなかったように思われる。

最後に、日本の現代インド地域研究がこのような豊かな成果を持ち得たことを喜びたい。近現代のインドに関心のある方には必読の書であり、この書物から多くの研究上のヒントを得ることが出来よう。そして、できうれば、より広範な視座から研究された「シリーズ現代インド」全6巻（2015）（東京大学出版会）との併読も期待したい。

（2014年11月6日受付）

（2015年1月23日受理）